

## 公表用論文要約

### 横道誠『グリム兄弟とその学問的後継者たちに関する研究』

グリム兄弟すなわちヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリム、およびその後継者たちの学者としての仕事について考察すること。本研究の目的をひとことで言えば、そのようになる。以上の目的を達成するために、本研究は2部構成を取っている。第1部では、おもにグリム兄弟ふたりの思想的共通点および相違点を整理し、基礎的な情報提供をおこなう。第2部ではグリム兄弟の先駆者たち、同時代人の協力者や競争相手、後続の時代の後継者をグリム兄弟の仕事に関連づけて考察しつつ、兄弟間の共通点と相違点についても改めて考察を深める。

本研究では、グリム兄弟の研究の学際性、民族主義やナチズムとの関係、多言語性、兄弟両方の仕事の特徴の強調に力を入れた。以下、順に説明していこう。

グリム兄弟の研究の学際性は、決して大きな注目を集めてこなかった。フリードリヒ・シュトロウの古典的な『ゲルマン文献学の小事典』は、グリム兄弟の多彩な活動に見通しを与えているが、個々の言及はあっさりしたものにはすぎない (Stroh 1952, 59-138)。ガブリエーレ・ザイツ、ハンス＝ゲオルク・シェーデ、シュテファン・マルトゥスそれぞれによるグリム兄弟の伝記 (Seitz 1984; Schede 2009; Martus 2009) は、グリム兄弟の仕事の全体像を俯瞰しつつ、伝記の性質上、立ちいった考察は控えている。ヤーコプ・グリムの仕事に焦点を当てたウルリヒ・ヴェスの『野生の文献学』 (Wyss 1979) や、グリム兄弟の初期の仕事に焦点を当てたローター・ブルームの『グリム兄弟とドイツ文献学の始まり』 (Bluhm 1997) はそれぞれ精緻な研究だが、彼らは「ドイツ文献学」としての、つまりドイツ語学・文学研究としての「ゲルマニスティク」に視野を限定している。

ほかの研究者もほとんど同様だ。クラウス・ヴァイマーはヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムを文献学の学問的整備への貢献という点から観測している (Weimar 1989, 224-229, 234-240)。ヤーコプについて、「しばしば「ゲルマニスティクの父」として名が挙がる」 (Hermand 1994, 32) と紹介するヨースト・ヘルマンは、現代的な意味での「ゲルマニスティク」、つまりドイツ語・ドイツ文学の学問史に焦点を当てつつも、「ゲルマニスティクにおいて、1850年代末から1960年代初頭にかけて、ドイツ語とドイツ文学に学問内面的に取りくむ傾向は強まってゆき、法律的側面や、政治的社会的側面はますます押しのけられてしまった」 (Hermand 1994, 48) と注釈し、ヤーコプがその流れに飲まれなかったことを指摘している。しかし、それ以上の考察はなく、ヴィルヘルム・グリムについての目立った考察もおこなっていない。ヘルマン・バウジンガーやインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンらによる民俗学史 (Bausinger 1971; Weber-Kellermann 2003) は、それぞれ優れた教科書なのだが、ヤーコプ・グリムの民俗学への貢献に叙述を制限している。

グリム兄弟の仕事を総体として理解する上で、もっとも実りある先行研究は、ルートヴィヒ・デーネケの『ヤーコプ・グリムとその弟ヴィルヘルム』 (Denecke 1971) だろう。この著作は、1970年代初頭までの研究状況をまとめた上で、グリム兄弟の仕事の総体として提示することを目的としているが、グリム兄弟に関する研究は、1985年から1986年にかけて、つまりグリム兄弟ふたりの生誕200周年に際立って興隆し、その後は停滞期を迎えたという事情がある。2012年から2015年にかけては、『子どもと家庭の昔話集』の初版の第1巻と第2巻が刊行されてから200周年にあたり、2012年にカッセルで国際シンポジウムが開かれ、その内容を収録した大部かつ2巻本の充実した論集が刊行されたなどの成果があったものの (Brinker-von der Heide 2015)、一部で期待されたほどの盛り上がりは起こらなかった。研究が停滞しているがゆえに、本研究はデーネケの著作に収められなかった後年の研究を踏まえ、2020年の視点からグリム兄弟の仕事に明瞭な視界を与えようとした。

ナショナリズムの創出という観点からすれば、グリム兄弟の仕事はナチズムも含めた後世の民族主義的な運動のために路線を敷いたわけだが、グリム兄弟の仕事はナチズムへの流れと近づけて考える仕事は、ドイツ文学研究ではほとんどなされていない。ウルリヒ・ヴェスは、ナチス時代に続くヤーコプ・グリムの事跡の美化に注目しつつも、ヤーコプの仕事とナチズムを接続させていない (Wyss 1979, 27-38)。ヘルマン・エングスターは、ヤーコプ・グリムの「ゲルマニア」への幻想や政治性を指摘し、ヴィルヘルム・シェラーがグリムの事績を「まったく非政治的な所業」として解釈したことを批判的に指摘しつつも (Engster 1986, 32)、ヤーコプとナチズムと結びつけることを避けている。ハルトムート・ガオル＝フェレンシルトは、シェラーによるヤーコプ・グリムの伝記に、ドイツ統一前夜のゲルマニストによる国民意識を観察しているが (Gaul-Ferenschild 1993, 9-13)、それ以上の議論をおこなっていない。

こうした研究状況を背景として、筆者がむしろ参考にしたのはドイツ民俗学史の分野だった。この分野では、一時期のドイツ民俗学がナチズムに染まったことに対する反省があらわで、バウジンガーもヴェーバー＝ケラーマンらも、ドイツ民俗学がナチズムとの結婚に向かうようにして発展したこと、ナチズム崩壊後には浄化が進められたことを強調し、ナチズムへと連なる道程にグリム兄弟の仕事も位置していたという展望を示している（Bausinger 1971, 33-47; Weber-Kellermann 2003, 30-39）。日本では河野眞の『ドイツ民俗学とナチズム』が、同じ展望を持ってグリム兄弟を扱っているのだが（河野 2005）、本研究もこの展望を共有しつつ、グリム兄弟の民間伝承とナチズムの関係を、特に兄弟の後継者たちの仕事を經由することで、考察した。

グリム兄弟の多言語性は、彼らの学際性以上に注目されてこなかった。ヘルマントは「ゲルマニスティックという分野」が、「愛国的方向の産物というだけではなく、国粋主義的方向の産物」なのだとして厳しく批判したが（Hermand 1994, 30）、その「国粋主義」はドイツ語とその文学への固執を必ずしも意味していない。ホルスト・ブルンナーは、ヘルマントに反撥するかのように「ゲルマニスティックは当初、観念的で政治的な綱領、国民的で愛国的だったが、国民主義的ではなかったし、ましてや国粋主義的ではなく、徹底的に世界市民的でもあった」（Brunner 2000, 13-14）と述べる。「国民主義的」でも「国粋主義的」でもなかったという主張には首肯しがたいが、「世界市民的でもあった」ことはたしかだ。というのもヤーコプ・グリムは「ドイツ語とドイツ文学のみならず、ドイツの民俗学、神話学、言語学、法制史、先史時代にも関心を抱いて」、「これらのすべての分野を、ひとつのゲルマン古代研究へと統合しようとしていた」し（Hermand 1994, 32）、ヴィルヘルム・グリムの仕事も兄のその企図を追従したのだが、彼らはドイツ語至上主義によるゲルマン狂ではなく、その仕事を多彩な言語の使用によって進めた。ライナー・ローゼンベルクは、「ヤーコプ・グリムは、ロマニステンとしておこなう法学研究から、ドイツ語とドイツ文学の学究に移行したが、それが成功したのは疑いもなく、ドイツ性のイデオロギーの影響下にあったからだった」と書く（Rosenberg 1981, 43）。だが、その「成功」は、彼の多言語を操る能力に依拠してのことだった。本研究は、グリム兄弟の著作の多言語性についても注目し、しばしば筆者自身もさまざまな言語を運用して、本研究を進めている。

本研究は、グリム兄弟両方の仕事の特徴を考察する。シュトローによる前述の書物は、「ゲルマン文献学の歴史」と題する箇所8割以上をグリム兄弟の事績に割いているが（Stroh 1952, 59-138）、これは「グリム兄弟」を偶像化したもので、ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムの「学問的意義」だけでなく、「純粋に人間的な偉大さ」を明らかにすることに興味がある（Stroh 1952, 59）。これに対して、本研究はむしろ彼らの人間らしい脆弱性に関心を置いている。ローゼンベルクは、「本質的に、「ドイツ語とドイツ文学に関する学問」としてのゲルマニスティックの構築は、サヴィニーの弟子、ヤーコプ・グリムの業績だった」（Rosenberg 1981, 43）と述べ、。ヴィルヘルムについては散発的にしか述べず、昔話集についての言及は完全に欠落している。『肖像画をとおしたゲルマニスティックの学問史』では、ヤーコプ・グリムが「あらゆるゲルマニストのなかで、もっとも有名な者」（Brunner 2000, 11）として検証される一方で、同書に収録された28人のゲルマニストたちのなかにヴィルヘルム・グリムの姿はなく、これは現代的なヴィルヘルムの位置付けと言える。デーネケの書物は、書名の『ヤーコプ・グリムとその弟ヴィルヘルム』ではヴィルヘルムの扱いが副次的に見えるが、実際にはバランスの良い叙述をおこなっているため、本研究はこの点でもデーネケを参考にしつつ、アップデートしようと志した。各種の伝記類も、兄弟をバランスよく記述するのが通例で、本研究では大いに参考にしている。

本研究の第1章から第4章にかけては、グリム兄弟の仕事の概要を、彼らの思想的背景を踏まえながら展望する。この際、前述したデーネケの書物の記述をアップデートしつつ、かつ重複が少なくなるように工夫している。グリム兄弟の互いの心情についての注目（第6節、第7節）、ヤーコプ・グリムの学問観についての整理（第10節、第11節）は、デーネケの書物では扱われなかった事柄であるし、多くの伝記もこれらの問題に詳しく言及しない。なかでも、グリム兄弟を通常の文脈を超えた思想史的連関から考察する作業（第4節以下）、彼らの記述の視覚性についての考察（第8節、第9節）、言語の系統についての整理（第15節）で、本研究の独自性は際立っていると自負する。

第5章から第8章にかけては、グリム兄弟の昔話収集について考察する。この方面の研究は汗牛充棟と言ってよいものがあるが、兄弟間の協同を細かく考察したものについては、先行研究が限られる。村山功光の『ポエジー・自然・子ども グリム兄弟と『子どもと家庭の昔話集』の「自然な教育」の理念』（Murayama 2005）は、グリム兄弟の文学理念の共通性と差異に注目している。これはきわめて緻密な研究だが、グリム兄弟の青年期に考察を集中させており、特に『子どもと家庭の昔話集』

（いわゆる『グリム童話』）の初版出版前後を究明していることに特徴がある。本研究では、『子どもと家庭の昔話集』の第2版以降や、グリム兄弟の壮年期と老年期に関するものも考察する。グリム兄弟が収集した昔話のうち、「灰かぶり」（いわゆる「シンデレラ」）、「ピヤクシンの話」（「ねずの

木の話」等とも訳される)に関する考察(第33節)、昔話に現れる「釘樽の刑」についての考察(第34節)も、グリム兄弟の互いの見解を詳しく考察したものとして、独自性が高いと言えよう。

第9章と第10章は、グリム兄弟の森に関するイメージ、ヤーコプ・グリムが編纂したスペイン語ロマンセ集、ヴィルヘルム・グリムがアイスランド語からドイツ語に翻訳した「エッダの歌」を考察する。第11章はヤーコプ・グリムの神話学に集中するものの、第12章はグリム兄弟が昔話「茨姫」の解釈について、いわゆる共同戦線を張っていたことを論じる。第9章に関しては、いずれの議論も先行研究が豊富と言えない。特に、グリム兄弟の森に関するイメージについては、本格的な研究は日本でまだ出版されていないし、スペイン語ロマンセ集に関する研究は、スペイン語に関する考察が必要という理由からドイツでも研究がない。第11章の「エッダの歌」に関する研究はアイスランド語に関する考察が必要という理由から、ドイツでも先行研究は限定されていたが、2014年に刊行されたクリストフ・ザイトラーによる『グリム兄弟のエッダ計画』が状況を変えたため、本研究はザイトラーが携わらなかった研究に力を注いだ。

第11章は河野眞の各種の著作を、第12章は野口芳子の論文「グリムの「いばら姫」の異型をめぐって グリム、ペロー、バジレにおける比較」(『グリムのメルヒェン その夢と現実』所収)を、本研究の出発点として利用し、それぞれの研究を大きく乗り越えることを目的とした。日本や中国にも視野を広げることで、むしろドイツ語圏では不可能に近い議論を構築できたと自負している。

第1部のさわだった新奇性としては、カント、ヘルダー、グリム兄弟を連続的に論じる(第21節)、通常は伝承研究で論じられる内容をグリム研究(ドイツ文学研究、思想史研究)と統合する(第35節、第36節、第37節、第36節)、新しい論点として近年浮上したLGBTQ+に関する考察を織りこむ(第31節)試みがある。第1部は従来のグリム研究を踏襲した記述が多いが、第2部での跳躍のために不可避の議論を形成している。他方、第2部に関してはその新奇性は際立っている。グリム兄弟の森についての見解の同時代人との比較(第39節)、ヤーコプ・グリムのスペイン語ロマンセ集の後継者による受容(第41節)、グリム兄弟およびヘルマン・グリム(ヴィルヘルム・グリムの息子)についてのエルンスト・ローベルト・クルツィウスの言及(第42節)、ヴィルヘルム・グリムの散文訳の分析、ヴィルヘルム以後の「エッダの歌」の翻訳(第48節)、ヴィルヘルム・マンハルトのドイツ語とそのジェイムズ・ジョージ・フレイザーによる英訳の比較(第52)説、「マンハルト型の学説」に日本での影響力(第55節)、ヴィルヘルム・グリムの学術的文体の分析(第62節)、中国と日本の「眠り姫」(第68節、第70節)、「眠り姫」の系統図の推測(第69節)などに関しては、独創性が高いと言える。

\*

## 目次 (1)

### 序—野生のゲルマニスティク (4)

#### 第1部 学者としてのグリム兄弟 (9)

##### 第1章 導入部 (10)

###### 第1節 グリム童話とその編纂者 (10)

###### 第2節 多言語、学際性、歴史 (11)

###### 第3節 理念と現実 (14)

##### 第2章 基礎的情報 (16)

###### 第4節 経歴と思想史的展望 (16)

###### 第5節 著作と書簡の全体像 (18)

###### 第6節 魂の片割れ (22)

###### 第7節 兄の思い、弟の思い (27)

###### 第8節 原風景と視覚性 (31)

###### 第9節 植物マニア (35)

###### 第10節 文系と理系 (43)

###### 第11節 学問分野、三位一体、「ゲルマニスト」 (47)

##### 第3章 学問分野 (51)

###### 第12節 法学 (51)

###### 第13節 文学研究 (60)

###### 第14節 民俗学 (69)

###### 第15節 諸言語についての補説 (71)

###### 第16節 言語学 (73)

###### 第17節 宗教学 (84)

- 第4章 時代と政治 (88)
  - 第18節 ヘッセンとナポレオン時代 (88)
  - 第19節 「ドイツ」と「ゲルマン」 (91)
  - 第20節 民族と自由 (95)
- 第5章 グリム兄弟と民間伝承 (100)
  - 第21節 カントの宇宙論、ヘルダーの地球論、そしてグリム兄弟 (100)
  - 第22節 文明人と未開人 (109)
  - 第23節 民族と民衆、自然と本性、芸術と技巧と人為 (114)
- 第6章 『子どもと家庭の昔話集』の成立 (124)
  - 第24節 歴史的背景と機運、ブレンターノ (124)
  - 第25節 読者、取材源、自然と教養 (129)
  - 第26節 著者問題、収集、女性 (134)
  - 第27節 忠実さ (139)
  - 第28節 残酷さと性的要素 (145)
  - 第29節 本文と注釈、初版から第2版へ (149)
- 第7章 ジェンダー論の観点からの展望 (158)
  - 第30節 グリム兄弟についてのジェンダー研究 (158)
  - 第31節 女と男、LGBTQ+ (161)
- 第2部 グリム兄弟とその学問的後継者たち (166)
  - 第8章 太古に結ばれた昔話 (167)
    - 第32節 昔話の注釈、神話と伝説 (167)
    - 第33節 「灰かぶり」と「ビヤクシンの話」 (175)
    - 第34節 釘樽の刑 (177)
    - 第35節 ボルテとポリーフカ (179)
    - 第36節 系統マニア (182)
    - 第37節 フィンランド学派とその批判者たち (186)
    - 第38節 世界神話学 (188)
  - 第9章 ゲルマンとロマンスの相克 (190)
    - 第39節 ゲルマニアの森 (190)
    - 第40節 古スペイン語ロマンセ (195)
      - 第41節 ロマニスティックとディーツ (201)
      - 第42節 クルツィウスと3人のグリム (205)
  - 第10章 『歌謡エッダ』の企画 (212)
    - 第43節 古アイスランド語、エッダ、王の写本、英雄の歌 (212)
    - 第44節 兄弟間の対立とその解消 (216)
    - 第45節 出版に向けて競争する (219)
    - 第46節 梗概と音韻 (232)
    - 第47節 逐語訳と自由訳 (236)
    - 第48節 ジムロック、ゲンツマー、クラウゼ (248)
  - 第11章 「マンハルト型の学説」 (254)
    - 第49節 『ドイツ神話学』 (254)
    - 第50節 『森と畑の祭祀』 (259)
    - 第51節 『金枝篇』 (264)
    - 第52節 ドイツ語を英語に翻訳するフレイザー (271)
    - 第53節 「マンハルト型の学説」の崩壊 (282)
    - 第54節 学問と文学のあいだの『金枝篇』、イギリスの事例 (291)
    - 第55節 ハイネ、柳田國男、折口信夫、石田英一郎、井本英一 (296)
  - 第12章 「眠り姫」 (305)
    - 第56節 「眠り姫」と「茨姫」 (305)
- 第57節 「森のひそやかさ」 (313)
- 第58節 「茨姫」という名、性の問題 (323)
  - 第59節 茨姫としてのベッティーナ、王子としてのヴィルヘルム (326)
  - 第60節 「茨姫注釈」全3版 (327)
  - 第61節 兄弟の共闘 (333)
  - 第62節 注釈の文体の変遷 (336)

第 63 節	ボルテとポリーフカふたたび (349)
第 64 節	ゴルター (355)
第 65 節	アールネ、トムスン、レート (362)
第 66 節	ウター (369)
第 67 節	ニーマン (375)
第 68 節	張雲容 (380)
第 69 節	話型「眠り姫」の全体像 (391)
第 70 節	江戸時代の「眠り姫」 (401)
結語	—「海外ゲルマニスティク」の可能性 (405)
謝辞	(407)
凡例	(408)
文献表	(409)